

千葉卓三郎にみる「外来青年」についての研究

川 原 健太郎

はじめに

本研究では地域における青年の関わりを考察するため、私擬憲法・

五日市憲法起草において中心的役割を果たした「外来青年」千葉卓三郎の考察を行う。ここで述べる「外来青年」とは、出身の地域から離れ、移り住んだ地域に土着し影響を及ぼした青年のことである。東京・三多摩地域の西部に位置する五日市は、明治期、地域全体で自由民権運動が非常に盛んな地域となっていた。五日市はこうした地域ぐるみでの自由民権運動を支える「場」が形成されたが、そのような状況下において、さまざまな青年による地域文化活動が行われており、五日市憲法がつくられた。このように、明治期五日市において地域文化の形成が進められていたが、その要因は、五日市という地域の開放性の中で地元有志、地元青年、さらに「外来青年」という三つの要素による交流が大きかった。こうした三つの交流について、筆者はこれまでの研究において、地域での開放性について着目すると同時に、地

元青年の中心であった深沢権八を中心に地元青年について考察を行ってきた。⁽¹⁾本研究では、仙台から他の地域を経て、五日市に移り住み影響を及ぼした「外来青年」の中心である千葉卓三郎について取り上げ、明治自由民権期の「外来青年」について考察する。

色川大吉はこの明治自由民権期の青年について、四つのタイプに分類している。それは土地にあつて活動していく「在村活動家」、中央を目指す「中央指向型」、財政的、精神的などで支えるいわゆる「後方守備型」、「産業ブルジョア型」である。⁽²⁾「外来青年」たちはこのうち、第三の「後方守備型」の人々に支えられながら活動を行っていたと考えられる。この時期の三多摩地域では、第三の型にあたる地元有志によって地域に集められた多くの書籍・雑誌があり、学習環境が整っていたために、多くの青年が都市から集まっているという状況であったが、こうした状況について色川大吉は「進んだ農村、遅れた都市」⁽³⁾と表現している。三多摩の外から、その充実した学習環境を求めて、「外来青年」が集っていることは、地域文化の形成にとって大きく影

響を与えたものであった。こうした意味で三多摩の地域文化が盛んであったこの時期は、三多摩の地域性をみていく上で注目すべき事例である。

地域文化形成に関わる地元有志、地元青年、さらに「外来青年」という三つによる交流の要素の一つである「外来青年」は、地域文化をみる上で欠くことのできない存在であると考えている。明治期以外における三多摩の外来の人物について例を挙げる。一九四〇年代後半の終戦直後期において、青年による地域文化運動、具体的には元八王子の多摩自由大学、福生の西多摩夏期大学などが行われているが、⁽⁴⁾そうした活動の中でも、疎開してきた講師による講座が行われていた。これらの人物は戦後復興に燃える青年の文化運動に対して、影響を与えていたといえる。本稿では地域における「外来青年」を考察すること、交流についてその一端を明らかにすることができると考えられる。

千葉卓三郎については、色川大吉、江井秀雄、新井勝紘らによる研究や、千葉の出身地である仙台における郷土研究があるが、本研究では、千葉卓三郎の「外来青年」という点に着目し、「外来青年」と地域文化活動の関わりを考察した点に特徴がある。具体的に千葉の遍歴をみながら、なぜ五日市という地域に土着していったのか、さらに、千葉が自由民権をどう考えていたかについて地域の人々との関わりを考察する。それによって地域文化形成に影響を与えた「外来青年」のあり方が相当に明らかになるものと考えられる。

一 千葉卓三郎の遍歴

本項では、千葉卓三郎が五日市に至るまでの遍歴について取り上げる。千葉は一八五二年六月、宮城県栗原郡白幡村に仙台藩の下級士族の長男として生まれた。始め儒学を学びながら、戊辰戦争の敗北を機に、医学、洋学など実利的学問をはじめ、浄土真宗、ギリシャ正教、カトリック教、プロテスタント等宗教的な信仰の世界へ入る、という経験をしている。⁽⁵⁾このように多くの精神的変化を経ているが、それは千葉の生い立ちと大きく関わっており、さらに千葉が三多摩に関わりを持つことに対して影響を及ぼしているものと考えられる。

千葉卓三郎の父宅之丞には、先妻・後妻ともに子がなく、後妻と協議後に妾ちかのを入れそこに生まれたのが卓三郎である。さらに千葉が生まれる前に宅之丞は危篤になり、先妻の里子の清水彦左衛門を千葉家の養子に迎え相続人とする。三歳の時には、ちかのは千葉家を去り、義母に育てられた。⁽⁶⁾複雑な環境に育った千葉であるが、その生涯において第一の転機となったのは、「仙台戊辰戦争における白川口の敗北」⁽⁷⁾であった。戊辰戦争での敗北の経験については、千葉がその後多くの精神的な迷いをみせていることから、千葉の精神面に影響を及ぼしたと考えられる。千葉卓三郎はこれを機に分家、平民となり、放浪生活となる。いわば、千葉が「故郷喪失者」「放浪の求道者」⁽⁸⁾となる出発点といえる。

医学、洋学などの遍歴を経た後、千葉が故郷を離れる契機となった

のがギリシャ正教との関わりである。一九七一年六月に駿河台に出て、ニコライより受洗をしているが、千葉卓三郎の入信が千葉にもたらした影響について、相沢源七は次のように記している。

「(一) 戊辰戦争の敗北者として、反薩長藩閥論者たる彼にとつて、ハリストス教(ギリシャ正教・引用者注)は、明治維新政府を遙かに超えて世界的であると考えたこと。(二) ニコライに接することによって、彼は惜し気もなく故郷を捨てて上京する契機となすに至ったこと。そして(三) この故郷喪失者は、その後数年の遍歴を経て、漸く五日市に足を踏み入れることとなること」⁽⁹⁾

故郷を失った千葉は、精神遍歴の中で接したギリシャ正教を学ぶ中で、仙台を離れ東京に出た。上京は新たな故郷といえる五日市に定住する一歩となったと考えられる。

こうしてギリシャ正教を契機に上京した千葉であったが、一八七五年五月にニコライから去り、安井息軒に学ぶことになる。安井はキリスト教排斥論者であるが、どのような理由によりニコライを離れ、キリスト教排斥論者に学んだのか。相沢源七は、ニコライが布教のために明治政府へ妥協をしたことへの失望、卓三郎の内にある明治新政府に対する叛逆精神が、この息軒に共鳴を覚えた、と述べている。⁽¹⁰⁾ しかし、一年を経たずに息軒が亡くなったことによって、再びキリスト教の門を叩き、フランス・カトリック宣教師ウイグルスに学ぶ。⁽¹¹⁾ この変

遷からは千葉の精神的な「迷い」をみることが出来る。このウイグルスへの接触は、千葉が五日市と関わることとなる直接的な要因となった。ウイグルス神父が布教を通して八王子付近を渡り歩いているのが一八七五―一八七六年と考えられており、千葉が五日市に関わりを持つようになったのはないかと考えられている。⁽¹²⁾ さらに、その後の一八七七年にはプロテスタントの宣教師マクレーに学んでいる。

千葉の精神遍歴はキリスト教からキリスト教排斥論者へと大きな変化をしており、このような放浪からも「故郷喪失者」「放浪の求道者」の一端がみえるが、故郷を喪失した千葉は外からの人物を多く受け入れている五日市への関わりを持ちながら、五日市への定住をする。千葉は自由民権運動が盛んであった五日市への定住及びその前後から、自由民権運動に関わっていたことが考えられる。

五日市の民権運動と千葉との関わりを考える際に、プロテスタントとの関係は興味深い。千葉が二年半あまりの間学んだプロテスタントの宣教師はアメリカのメソジスト監督教会から派遣されたマクレーであったが、このメソジスト派はプロテスタントの中でも、もっとも社会活動に熱心なグループであり、この派からは自由民権運動や平和運動、社会運動に参加した人が多数出ているという点は特筆すべきといえる。⁽¹³⁾ これについて、色川は千葉が「自由民権家に飛躍するため⁽¹⁴⁾の最も手近なききっかけになった」と述べている。千葉は五日市に関わりを持ちながら、社会運動に携わるグループとの接触により、自由民権運動に関わったと推測される。

これまで述べてきたように、千葉は非常に多岐に渡る学問と接しながら、ギリシャ正教からキリスト教排斥論者へ、カトリックからプロテスタントへとというような大きな変化を経てきた。千葉の転換には大きな苦悩があったと考えられるが、この経験からみてとれることは、故郷を離れるという物理的な放浪と共に、精神的にも様々な学問への迷いへの影響をもったことである。このような物理的、精神的放浪をしながら五日市に関わりを持ったことについて着目したい。そこには何らかの五日市の地域性との関わりがあったのではないかと考えるためである。そのため、次項では五日市が故郷喪失者千葉卓三郎を受け入れた理由について考察したい。

二 故郷喪失者を受け入れた要因

千葉が五日市に受け入れられた要因を考察する上で、重要と考えられるのが、千葉が教鞭をとった勸能学校である。この勸能学校とは、「五日市・深沢・入野・館谷の四か村連合で設置された公立の小学校」⁽¹⁵⁾であり、学芸講談会や五日市憲法の起草における拠点となった学校である。ここでは、千葉をはじめ、多くの教員が外からの出身の者で占められていた。

この勸能学校では、「同じ仙台藩出身の永沼織之丞が勸能学校の初代校長、伊藤道友が同訓導として、千葉吾一が戸倉学校という具合に、同じ仙台人の仲間が教師に」⁽¹⁶⁾なっていた。こうしたことは、千葉が五日市に招聘されることについてなんらかの影響を与えていたと考

えられる。

永沼は、千葉と同様に仙台藩士として戊辰戦争に従軍しており、敗北する経験をもっていた人物である。両者ともに「故郷を離れ、ただひたすら信仰や学問を求めて研鑽を積み、第二の故郷ともいえる新天地を求めて入りこんできた」⁽¹⁷⁾ことについて共通している。このような人物を、開放性を持つ五日市は積極的に受け入れてきた。それが勸能学校や、そのメンバーを中心とした民権活動グループ、学芸講談会である。こうした地域性もたらした、外来文化の受け入れこそが新たな地域文化につながっていったと考えられる。

千葉が五日市に定住することの理由について、色川は「深沢、土屋、内山らを中心とした中心とした五日市学芸講談会や勸能学校や村の自治体が、他所では見られない創造的なコミュニティを作り出していた」⁽¹⁸⁾と説明している。さらに、「五日市地方の教育や経済や社会組織はことごとく同志の内山や土屋や深沢らの手中にあったのである。そのため警察官までがかれらに同調したり、職をなげうって民権運動に参加したりするという雰囲気」⁽¹⁹⁾がつくられていたことも着目すべき点である。外から五日市に移り住んだ千葉にとって、このような地域的な環境の影響は重要であったのではないか。これには故郷の喪失に対して、何らかの作用があったものと考えられる。

永沼織之丞のように、明治自由民権期の五日市は多くの外来人を受け入れており、さらに地域を挙げて自由民権運動の盛んな状況が展開されていた。色川は「千葉卓三郎がはじめてその鋭鋒を発揮しえた

五日市とは、こうした「上げ潮の里」⁽²⁰⁾であると述べているが、この五日市の地域状況は故郷喪失者である千葉にとって、外来人を受け入れる環境が定住する理由と合致していたといえる。

千葉卓三郎を中心とした青年達によって議論が行われており、五日市憲法起草にも大きな影響を与えた、学芸講談会における議論からみることが出来る地域による千葉の受け入れも、こうした定住の理由の一つとして挙げられる。学芸講談会なども含めて五日市という地域全体での自由民権運動の状況を考えると、それは千葉にとって「生まれてはじめての幸福」⁽²¹⁾であった。つまり、千葉の考えを支え、その思考について実行に移すための環境が整っていたのだといえる。外から多くの人々が定住していた五日市の学芸講談会において、「互ニ親和スルコト一家族ノ如クナルベシ」⁽²²⁾という規約もみることが出来る。このことは五日市という地域の開放性を示しており、ここから「外来青年」の地域の受け入れには、その開放性が影響を及ぼすということが考えられる。

千葉と大きくかわりを持ち、千葉を支えていた学芸講談会の構成をみると、年齢については、一〇代が二一・二％、二〇代が四八・一％とほぼ四分の三を占めているが、学芸講談会会員の土地の所有面積が、大地主というのは三、四名で後は中農や土地をまったく持たない人も存在しているということから色川大吉は貧富の差をこえ、学歴・身分の違いをこえ、人間的つながりをもつて結集した会であったと学芸講談会について述べている。⁽²⁴⁾こうした人間的つながりによる交

流は、千葉がその力を発揮する上での支えとなっていたと考えられる。この学芸講談会では一〇名近い放浪者型の青年が参加しているが、特にこの点は注目される。千葉を含め、多くの放浪者型の「外来青年」が、学芸講談会の活動などを通じて、五日市に影響を及ぼしていたが、この過程には「外来青年」が地域へと影響を及ぼしながら地域文化が形成された影響をみることが出来る。「外来青年」を受け入れ、地域の青年や地元有志との交流を持つには、そのための要因となるものの存在が必要ではないか。「外来青年」を受け入れた五日市にとっては、地域の開放性や、在地の人間の受け入れがその要因にあたると考えられる。

三 千葉卓三郎の五日市における役割

学芸講談会を中心とした五日市の自由民権運動では「憲法起草を運動方針の大眼目」⁽²⁶⁾として活動が行われてきた。千葉卓三郎はこの五日市の中でどのような役割を果たしてきたのか、その位置付けについて本項では取り上げる。

五日市憲法は、「実現可能な漸進的憲法を構想し（中略）大多数の民権家の現実意識を集約した公約数的なもの」⁽²⁷⁾であると色川は述べている。このようなことは五日市憲法の特徴の一つであり、こうした憲法を千葉が指向したことは、千葉に対して五日市という地域や地元の人々が与えた影響によるものではないかと考えられる。五日市の影響を受け、地域の人々と関わりながら、その中で千葉は五日市憲法の起

草をしていったのではないか。

五日市における千葉の位置付けについて、新井勝紘は次のように述べている。「二〇四条もの条文を持つ『五日市憲法』を神奈川県下の山村で創造できたのは、集団的な民権学習にプラスして、理論的指導者・千葉卓三郎の存在が不可欠であった。それはまた最後に条文にまとめあげた千葉にとってもいえることで、数十人の仲間と共に展開している地域の民権運動を抜きにしては、実現不可能であった。集団と個人の相互の力が相乗して、普段の実力以上の成果を出すことができたと考えられる⁽²⁸⁾」。自由民権運動が盛んであった明治期の五日市では、学芸講談会などを中心に多くの青年が学習活動に関わっており、議論が重ねられていた。その中でも中心的な役割を果たしていたのが千葉卓三郎である。新井勝紘が述べているように、千葉は議論に関わりながら、それをまとめる役割を果たしていたと考えられる。地域における私擬憲法作りは、地域の人々の様々な意見を踏まえた上で集約するという作業が必要のために、非常に困難と考えられるが、新井はこれについて「起草のための議論を十分に咀嚼し、所属する会員の納得できるような内容に組み替え、補充修正し、かつ憲法全体として条文相互に矛盾のない草案に完成させることができる能力を持った人物の存在が大きいのである。『五日市憲法』⁽²⁹⁾における千葉卓三郎は、まさにそうした立場にいた民権家であった」と述べている。この千葉の存在こそが、地域での中心としての役割を果たしていた。いわば支柱としての役割を果たしていたのだと考えられる。物理的、精神的な放浪を経て五日

市にたどり着いたが、多くの意見を集約できる能力があったことは五日市の受け入れとつながっていたと考えられる。

「故郷喪失者」「放浪の求道者」である千葉卓三郎は、五日市の開放性によって受け入れられながら、その地域における自由民権運動の中心としての役割を果たしていた。これは、その経験による学問的な能力の側面についてと同時に五日市の人々との関係の側面があるといえる。

千葉の五日市の在地の青年との関わりについてその一端が伺えるのが、一八八一年の千葉が死去する直前、九月の千葉の深沢権八への書簡である。

「一 衆愚貴地在勤中不残御厚恩ニ沐浴シ、尚且海南行資まで御厄介願上居候段、誠ニ感涙ニ堪へず難有奉拝謝候（中略）一 土屋両家、馬場、大福、佐藤、北村、永沼氏等へもよろしく」⁽³⁰⁾

これは勸能学校に在職中の五日市での厚遇の感謝を示したものである。ここで名前を挙げられているのは土屋勘兵衛、常七、馬場勘左衛門、大福清兵衛、佐藤新平、北村弥助、永沼織之丞。ここに挙げられた全員が学芸講談会の会員であり、そのうち永沼を除く六名は在地の人間である。

こうした千葉と地域の人々との交流については、故郷喪失者千葉にとって、その力を発揮するためにも重要なものだった。こうした交流

は千葉の晩年における書簡からもみることが出来る。自由民権運動で意見を集約する役割を発揮した千葉が五日市の地域の人々に支えられていたことが読み取れる。

四 千葉卓三郎の精神

五日市に受け入れられながら五日市憲法の中心的な役割を果たした千葉は、自由民権運動をどう考えていたか。本項では千葉卓三郎の精神についてとりあげる。千葉が著した代表的な論文に、「王道論」と「読書無益論」があるが、ここではこれらの著作をみながら、千葉の考え方の一端について考察したい。

千葉の述べる「王道論」は一八八二年秋に千葉卓三郎によって書かれた。新井勝紘はこの論文について、「千葉卓三郎の思想を考えるに、最も主要な論稿である」ととらえているが、この「王道論」では「王道」という言葉を通して、千葉の民権運動への考え方が述べられているものである。その主旨は「古代中国の政治思想（いわゆる儒教の原典）によって、明治の立憲制の理念を構築」しようとしたものである。⁽³¹⁾

「王道」とは何であるのか。千葉は「何ヲカ明治今日ノ王道ト謂フ乎、曰ク立憲ノ政体即チ是ナリ、立憲ノ政体ヲ建テ、国約ノ憲法ヲ制定シ、抛テ以テ国会ヲ開設シ、上ハ以テ王室ノ尊榮ヲ無彊ニ護シ奉リ、下ハ以テ億兆ノ福祉ヲ永遠ニ保全シ、上下供ニ其慶ニ頼テ以テ各其志ヲ遂ケ、政ニ倦ムナカラントスル者ハ此レ皆ナ王道ヲ顕彰スル所以ン

千葉卓三郎にみる「外来青年」についての研究（川原）

ノ者ナリ」と論じている。千葉にとっての王道とは立憲政体であり、憲法を制定して国会を開設することである、と千葉自身は述べているが、ここからは、千葉の考える民権論が明らかとなっている。王道論はいわば千葉の自由民権論を、立憲制を挙げて述べたものであるといえるが、その考え方が形成されるようになった背景には、千葉自身の精神と共に、五日市での議論による千葉への影響も存在しているのではないかと推測される。それは学芸講談会の討論題集をみても、「国会ハ二院ヲ要スルノ可否」「憲法改正ニハ特別委員ヲ要スルノ可否」というような立憲制に関わる議論が多くなされているためである。⁽³⁴⁾

千葉の精神と、地域の考え方との関わりについて、新井勝紘は五日市憲法の条文の中で、第二篇公法の第一章国民の権利に書かれている「府県ノ自治ハ各地ノ風俗習例ニ因ル者ナルカ故ニ、必ラス之ニ干渉妨害ス可ラス、其県域ハ国会ト雖モ之ヲ侵入可ラサル者トス」という条文を取り上げ、これについて「地方自治権の絶対的な不可侵性を示している。（中略）上意下達型行政の中で苦悩し続けた現実を直視し、またその自らの体験を踏まえたからこそ、こうした強い自治意識が芽生えたといえる」と述べている。⁽³⁶⁾ ここには千葉の明治政府に対する反発精神と五日市での民権家の精神が呼応したものであったと考えられる。

「読書無益論」は千葉が一八八三年一月に三二歳で死去する、その数ヶ月前に書かれたものである。その内容の中には、「多芸專業ナク貪読創思ヲ害スト、蓋シ世人ノ芸多ク書ヲ読テ而シテ尚ホ往々一事

一業ヲモ成シ得サル者ハ主トシテ皆此多芸貪読ニ由ラサル者幾ント少レナリ（中略）夫レ爾リ是故今試ニ業ヲ定メテ専修シ、書ヲ読ンテ精ヲ得ルノ要領綱維ヲ提挈開示シテ以テ略ホ是ヲ焉ニ論セン⁽³⁷⁾」というものをみることができる。本をただ読むというだけでなく、一つに学問を定めてやるということが大切であると述べている。これについて、多くの学問について迷いをみせながら彷徨していた、千葉の考え方、さらにはここには千葉の遍歴についての苦悩がみえる。加えて、実践的活動の考え方についても記述されている。千葉は「専ハラ智識ヲ蓄フルノミヲ力トム可ラス、必ス先ツ我有ル所ノ智識ヲ運用スルヲ力トムヘキナリ」と「読書無益論」の中で記している。

ここには本で得た知識だけではなく、必ずそれをどのように生かすか、ということが重要だと書かれている。これは五日市での地域状況と密接に関わっているのではないか。五日市の中では地域ぐるみでの自由民権運動についての取り組みがなされており、それに関わって多くの地域活動が展開されていたが、活動はこうした政治運動だけにはとどまらない。

協立衛生義会といった、人々の保健と衛生のための自主組織⁽³⁹⁾にも、西多摩の自由民権家は関わっており、これは五日市の人々の自由民権運動への取り組みの状況を示しているものといえよう。この「読書無益論」は、千葉の五日市の自由民権運動に対する取り組み姿勢を示していたともいえるものであり、五日市の中で活動していく上で、討議や憲法の起草活動以外にも、幅広い活動に関わっていた千葉の状況

とその中での方をみることができる。

五 晩年の千葉卓三郎と地域の青年

一八八三年一月に千葉卓三郎は結核によって三二歳で死去するがそれを支えた青年達との関係について、この療養中の数年における千葉と地域青年との交流、その後の影響について本項で述べる。

千葉は五日市を去った永沼織之丞に代わり、一八八一年に勸能学校二代目校長に就く。そこでの運営は、五日市の青年で自由党に入党した深沢や内野小兵衛が学務委員に選出されるなど、かなりリベラルなものであり、千葉は自由に自分のことができた。⁽⁴⁰⁾ こうした、「かれら（千葉ら民権運動の担い手…引用者注）が町村自治の実権を握っているという、まさに地域ヘコンミュニケーション⁽⁴¹⁾的な『場』（新しい質の共同体）⁽⁴¹⁾」という状況は、五日市という地域での「外来青年」と地元青年達の結びつきを明示している。放浪を続けてきた千葉にとって、こうした状況は充実したものであったと考えられる。

しかし、その後まもなく結核を悪化させ、翌一八八二年六月には草津温泉へ療養に行った。これは千葉の同志らのすすめであった。すでに半身が不随であるほどの状況だったが、この時にも五日市の青年を激励している。結核が悪化した後もその後一年半でいくつもの論文を書き、同志を激励し、民権運動や教育に奮闘していた。⁽⁴²⁾

さらに一年を経て一八八三年春には、病勢が急に悪化し、⁽⁴³⁾ 上京して入院をする。その間も、五日市の同志によって支えられていた。特に

深沢権八との親交については、千葉にとって非常に重要であった。こうした背景には、深沢家が書物を集め、都会から多くの青年が集る学習環境を作っていたように、千葉のような外から流れ着いた者を受け入れ、地域の運動を支える役割を果していく深沢の精神がある。こうした千葉を支える活動からは、「外来青年」と地域青年との関係性の構築が考えられる。千葉を追悼する深沢の詩には次のような一節がある。

懷君意氣捲風濤 郷友会中尤俊豪

雄弁人推米迦理 卓論自許仏蘆⁽⁴⁴⁾騷

千葉卓三郎を会の中で最も俊豪であり、雄弁であったというこの詩には千葉と深沢との結びつき、五日市における意見のまとめ役であった千葉の立場が表されている。地元の青年と結びつきながら、千葉卓三郎は五日市に定着していった。千葉の地域文化に与えた影響は五日市憲法と共に、その教え子の存在がある。「千葉卓三郎を慕った非常に優れた弟子たちが、東京都下の町や村に」⁽⁴⁵⁾おり、こうした者たちとの関わりから、千葉の五日市への影響が確認することができる。

まとめ

本研究では、地域文化形成における「外来青年」の関わりを明らかにするため、千葉卓三郎について考察を行った。第一項では千葉卓三

千葉卓三郎にみる「外来青年」についての研究（川原）

郎の遍歴について取り上げた。千葉は戊辰戦争の敗北を契機に、放浪をすることとなったが、それは物理的な面にとどまらず学問など精神的な面でも同様であった。そのような迷いをみせながら自由民権運動に関わったことが確認された。第二項では故郷喪失者千葉卓三郎が五日市になぜ受け入れられたのかを考察した。そこには地域の持つ開放性に関わっているということがわかった。千葉は五日市が開放性を有していたために、定住し地元有志や地域の青年との交流をもつことができたのではないかと考えられる。第三項では千葉の五日市で果たした役割を確認した。五日市憲法を起草することに関わって、千葉には意見を集約する能力があったこと、五日市の人々との交流から地域人に支えられていたことが明らかになった。第四項では千葉の考え方についてとりあげた。千葉の精神についてみると共に、それが五日市の民権活動と関わりがあるということを考察した。最後の項では晩年の千葉をめぐる五日市の状況から、民権運動が盛んであるという「場」の形成されていた五日市と千葉の結びつきを確認した。さらに千葉の教え子の存在から、千葉が三多摩に残した影響について考察した。

五日市という場を中心として、様々な出身の「外来青年」が集ってきたが、こうした活動は五日市の青年など地域の人々とも関わり合いながら、地域における文化活動につながっていくという展開をみることができた。「外来青年」千葉卓三郎による五日市の人々の意見の集約など、「外来青年」が地域の人々に影響を及ぼしたと考えられ、そうした役割はいわば五日市憲法起草の上での触媒のようなものと考え

られる。地域文化の形成における地元有志、地域青年、「外来青年」による交流の中でも、このように五日市私擬憲法の起草に寄与した、「外来青年」の持つ触媒の役割に着目したい。

以上のことから、千葉は五日市の地域の人々に対してコーディネーターのような役割を果たしていたと考えられる。本稿で述べたように、二〇四条という非常に大きな私擬憲法である五日市憲法の起草には千葉自身の考え方や知識と共に、五日市における青年達の持つ様々な意見が重要な意味を持っていた。これらを集約し、五日市憲法の起草に中心的役割を果たした千葉には「外来青年」の地域文化形成に与えた影響に占める重要性を確認できる。

本研究では「外来青年」千葉を考察するためにその遍歴や精神について取り上げた。しかし、千葉の精神遍歴やそれに対する考えなどについて更に詳細にみながら実証していくという課題がある。さらに、今後三多摩における「外来青年」の課題について、後に与えた影響をその後の地域文化活動から見出していくことが重要となると考えている。

注(1) 川原健太郎「明治期五日市での地域文化形成における青年の関わり」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊』一〇号—二、二〇〇三年）では、地域の開放性に着目をし、青年（特に地域青年）との関わりについて考察している。その中で、地元有志の深沢名生、権八父子が書籍・雑誌等多くの文献を集めた「私設図書館」や、青年らによって議論が行われていた学芸講談会は、特に地域の開放性の中でも重要な役割を担っていた。

(2) 色川大吉、江井秀雄、新井勝紘『民衆憲法の創造』評論社、一九八三年、八四—九二頁。

(3) 色川大吉「多摩の民衆文化の源流」(著者代表色川大吉『民衆文化の源流』平凡社教育産業センター、一九八〇年)、五頁。

(4) 東京都立教育研究所編『東京都教育史 通史編 四』東京都立教育研究所、一九九七年、一二一—一六頁。

(5) 五日市町史編さん委員会編『五日市町史』五日市町、一九七六年、七一—九頁。

(6) 相沢源七『民衆憲法の創始者・千葉卓三郎の生涯』宝文堂、一九九〇年、一五—一六頁。

(7) 同前、二二頁。

(8) 『民衆憲法の創造』前掲、一九七頁。

(9) 『民衆憲法の創始者・千葉卓三郎の生涯』前掲、四三頁。

(10) 同前、六四—六七頁。

(11) 同前、八六頁。

(12) 『民衆憲法の創造』前掲、一九九頁。

(13) 同前、二〇一頁。

(14) 同前。

(15) 新井勝紘「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち」(色川大吉編『三多摩自由民権資料集 上巻』大和書房、一九七九年)、一六七頁。

(16) 前掲『五日市町史』、七二〇頁

(17) 「民衆憲法の創造—五日市の民権運動と起草者たち」前掲、一六七頁。

色川大吉『新編 明治精神史』筑摩書房、一九九五年、二三—三八頁。なお、土屋勘兵衛・常七は、老年の在地名望家グループに属するメンバー。内山安兵衛は深沢権八と同じく若手グループに属するメンバーである。(秋川市史編纂委員会編『秋川市史』秋川市、一九八三年、一四〇頁。)

(18) 『新編 明治精神史』前掲、一三—三八頁。

- (19) 『民衆憲法の創造』前掲、二〇一頁。
- (20) 色川大吉『明治の文化』岩波書店、一九七〇年、一一三頁。
- (21) 『学芸講談会盟約』（色川大吉『三多摩民権史料集』大和書房、一九七九年）、一九四頁。
- (22) 「五口市憲法草案の碑」（記念誌編集委員会編『五口市憲法草案の碑』建碑誌）五口市町役場、一九八〇年、三〇頁。三〇代も十一・一%おり、一〇代く三〇代で八割ほどを占めている。
- (23) 同前、四六頁。
- (24) 色川大吉「個人・地域・民族の歴史」（『社会教育会館資料No. 4 昭和四十四年度講演集 多摩の近代史―底辺の視座から―』（東京都立川社会教育会館、発行年不詳）二八頁。学芸講談会には大分、宮城、岩手、函館からも参加している。
- (25) 江井秀雄『多摩近現代の軌跡―地域史研究の実践―』けやき出版、一九九五年、一〇一頁。
- (26) 『新編 明治精神史』前掲、二四四頁。
- (27) 新井勝紘「自由民権運動と民権派の憲法構想」（江村栄一編『自由民権と明治憲法』吉川弘文館、一九九五年）、一一〇頁。
- (28) 同前、一一二頁。
- (29) 「千葉卓三郎書簡（深沢権八宛）」一八八一年九月一日（『三多摩自由民権運動史料集』前掲）、二五八頁。
- (30) 『民衆憲法の創造』前掲、二二三頁。
- (31) 同前、二〇七頁。
- (32) 天舟千葉道海『王道論』（『三多摩民権史料集』前掲）、二四六頁。
- (33) 「討論題集（深沢権八手録）」（『三多摩民権史料集』前掲）、一九六一―一九八頁。
- (34) 「五口市憲法草案」（『三多摩民権史料集』前掲）、二二〇頁。
- (35) 「自由民権運動と民権派の憲法構想」前掲、一〇六頁。
- (36) 天舟千葉道海『読書無益論』（『三多摩民権史料集』前掲）、二五三頁。
- (37) 同前、二五四頁。
- (38) 『明治の文化』前掲、一五四―一五五頁。
- (39) 同前、一一九頁。
- (40) 『民衆憲法の創造』前掲、二〇八頁。
- (41) 『民衆史―その100年』講談社学術文庫、一九九一年、二三二頁。
- (42) 『新編 明治精神史』前掲、二三二頁。
- (43) 深沢権八「漢詩 悼千葉卓三郎」（前掲『三多摩民権史料集』、二九五頁。
- (44) 『民衆史―その100年』前掲、一三五頁。奈良橋村（現東大和市奈良橋）の自由民権運動に関わった鎌田喜十郎や、上川口村（現八王子市上川町）の困民党指導者の秋山増蔵が挙げられる。